

# お竹大日如来と江戸の庶民信仰

『懐溜諸屑』を手がかりに

高山慶子

Osake Dainichi Nyorai and Popular Folk Belief in Edo : Examining Futokoroni-Tamaru-Morokuzu

TAKAYAMA Keiko

はじめに

- ① お竹大日如来
  - ② 開帳と出版物
  - ③ 信仰と娯楽
- おわりに

## 【論文要旨】

お竹大日如来とは、江戸で下働きをしていた竹という名の女性が、大日如来として出羽国に祀られたものである。幕末の江戸の落語家である入船扇蔵が収集した摺物を貼り合わせた『懐溜諸屑』には、嘉永二年（一八四九）にお竹大日如来の出開帳が江戸で行われた際に発行された単色墨摺りの一枚摺「於竹大日如来縁記」が貼り込まれている。本稿はこの一枚摺を手がかりに、お竹大日如来の由来や成り立ち、およびお竹大日如来を取り上げた摺物や関連する出版物を検討し、江戸庶民の信仰や文化のありようを摺物に着目して明らかにするものである。

分析の結果、お竹大日如来は由来や成り立ちに厳密な正確さを欠くこと、それでも広く受容される神仏になったことを指摘した。嘉永二年の出開帳に際しては大量の出

出版物が発行されたが、複数の業者が販売目的で作成した縁起は記述が一定せず、内容の不正確さは助長されたと考えられる。また、お竹大日如来には娯楽としての役割も期待され、錦絵などの一枚摺の発行だけではなく、お竹大日如来に関する創作が著されたり、お竹大日如来を「おためだいなしわるい」と滑稽化したり、大日如来ならぬ大日用菩薩として見世物とされたりした。江戸の人びとはお竹大日如来を信仰としてだけではなく、むしろ信仰以上に娯楽として受容したが、多種多様な出版物の流布は、信仰と娯楽（聖と俗）の混交という現象を、進行・助長させる役割を担ったと考えられる。

【キーワード】 於竹、出開帳、出羽、国芳、とんだ霊宝

## はじめに

お竹大日如来とは、元和（一六一五～二四）・寛永（一六二四～四四）のころ、江戸の大伝馬町一丁目の豪商で名主の佐久間家の下で働いていた竹という名の女性が、大日如来として出羽国羽黒山の黄金堂に祀られたものである<sup>(1)</sup>。

羽黒山の荒沢寺正善院に伝わる嘉永二年（一八四九）閏四月の縁起絵巻<sup>(2)</sup>によると、武蔵国比企郡の行者（仏道の修行者）の乗蓮が、生身（その身を備えた現世の仏、この世に現れる仏の化身）の大日如来を拝みたいと願い、何年も羽黒山に通っていた。ある年、いつものように玄良坊宣安の宿坊に逗留したとき、乗蓮は、「あなたが私の姿を見たいと思うならば、江戸の佐久間家の侍女竹を拝みなさい」と告げられる霊夢を見た。果たして乗蓮と宣安は江戸に出て竹を探し出して拝むと、竹の全身から光明が発せられた。二人は終夜声をそろえて経をあげ、翌朝出羽国に帰った。竹は部屋にこもって念仏に専心するようになり、寛永一五年（一六三八）三月二日に亡くなった。竹の死後、佐久間夫婦は竹の等身像を彫刻して持仏堂に納め供養した。そして寛文期（一六六一～七三）には羽黒山黄金堂の境内に仏殿が建てられ、玄良坊を別当とし、その像が安置されたという<sup>(3)</sup>。

生前の竹は信心深く、食事を貧しい人たちに分けて自らは残飯を食したなどと伝えられている。その竹に由来するお竹大日如来を拝むと、食事を粗末にせず、常に忍辱（耐えしのび怒りの気持ちを起こさない）、慈悲の心を持ち、信心深く過ごせるとして、人びとはお竹大日如来に現世安穩と後生善処を託すといと縁起に記されている。

お竹大日如来は、「お竹大日」「佐久間大日」などとして知られたが、江戸時代には江戸で四回、出開帳が行われた<sup>(4)</sup>。

第一回…元文五年（一七四〇）七月一日～閏七月晦日、六〇日間、湯島天神

第二回…安永六年（一七七七）七月一日～、六〇日間、愛宕円福寺

第三回…文化二年（一八一五）七月二日～、六〇日間、浅草寺

念仏堂

第四回…嘉永二年（一八四九）三月二日～、六〇日間、回向院

※第一回の開帳寺社は、出羽羽黒山麓蓮台寺

※第二・三・四回の開帳寺社は、出羽羽黒山麓玄良坊

冒頭で紹介した縁起絵巻は、第四回の出開帳のときに作成されたものであるが、この嘉永二年の出開帳に際しては、多色刷りの浮世絵版画である錦絵をはじめとして、多くの摺物が版行された。史料1は、この出開帳の折に作成されたお竹大日如来の単色墨刷りの一枚摺で、幕末の江戸の落語家である入船扇蔵が収集した摺物を貼り合わせた帳面『懐溜諸屑』に貼り込まれている<sup>(5)</sup>。本稿はこのお竹大日如来の一枚摺を手がかりに、お竹大日如来の由来や成り立ち、およびお竹大日如来を取り上げた摺物や関連する出版物を検討し、江戸庶民の信仰や文化のありようを、摺物に着目して明らかにするものである。

## ①お竹大日如来

お竹大日如来については、地元の山形県において、あるいは民俗学の分野などで、著作が発表され、古くからその存在が知られてきた<sup>(6)</sup>。江戸で下働きをしていた竹という名の女性がお竹大日如来として祀られたという筋立ては、大概の史料で一致している。しかし、竹の出身地、竹が仕えた家の主人、竹の没年、そして竹にゆかりの山が出羽国の羽黒山か湯殿山かをめぐっては、記述が一定しない。

これらのうち竹の主人については、多くの史料に「佐久間」とあるが、



史料 1 「於竹大日如来縁記」

その主人の名前は、佐久間善八、佐久間勘解由、馬込勘解由などとされている。安永六年（一七七七）の略縁起では、竹の主人を「武江佐久間氏何某」、「佐久間主人」としながら、その名を「勘解由」とし、竹を「武江大伝馬町何某馬込召使ふところの婢女」と説明している。

江戸の大伝馬町（現在の中央区日本橋本町二・三丁目、日本橋大伝馬町）は、本町一〜四丁目に続く本町通りに面した町で、日本橋北側の江戸町人地の中心部に位置した。<sup>(8)</sup>一七世紀の大伝馬町には、一丁目に佐久間善八、二丁目に馬込勘解由という名主が存在したが（善八・勘解由は歴代当主の通称）、「佐久間善八家、元禄十二卯年迄大伝馬町老丁目北側西角京間拾貳間一尺家屋敷所持、名主役も相勤来候所、不身上二而役儀致退役、家屋敷西村弥右衛門江金三千兩ニ売渡シ、花川戸町南表七間口之家屋敷江同年塾居ス」とあるように、佐久間善八は元禄一二年（一六九九）に退転して名主を辞め、浅草花川戸町に退いた。馬込家に伝来した「姻戚佐久間家之書物」<sup>(10)</sup>には、「佐久間家の」五代目善八郎娘善正之姉、馬込之三代目善入（馬込家三代喜興）之後妻二而、栄寿院（喜興娘・馬込家四代影盛の妻つる）、心光院（喜興娘けん）出生、栄寿院ハ四代目泰殿（影盛）之妻、照殿（馬込家五代目雅珍）出生、「佐久間家の」六代目善八郎、病身二而御役難勤、御伝馬役、名主役、糸割符共二照殿へ譲」とあり、佐久間家の娘が馬込家三代目の後妻となり、その後妻の生んだ娘（栄寿院）が馬込家四代目の妻となり五代目を生んだ。佐久間家が六代目で退転した際には馬込家の五代目に伝馬役・名主役・糸割符を譲渡したことも知られる。佐久間家と馬込家は、互いに隣り合う町に住む縁戚であった。<sup>(11)</sup>

竹の主人について、天正期（一五七三〜九二）から延宝八年（一六八〇）までの種々のうわさや風説の類を年代順に書き記した「玉滴隠見」<sup>(12)</sup>には、以下の通り記されている。

竹ト云下女叶仏力不思議事

江戸大伝馬町ノ名主佐久間善八ト云ケル者ノ召仕ナル竹ト云ケル下女、去年三月廿一日ニ死シタリ、此竹事、主ノ善八ハ問屋ニテ有ケレハ、大勢ノ者ノ食餌ニカ、ツテイケレトモ、聊モ穀三宝ヲ龜相ニセスシテ、非人ヲ憐ミ、其雑火ノ余リヲ以テ牛馬ヲ飼ナトシテ一生送りシカ、死シテ其俣羽州湯殿山麓ニ金色ノ光ヲ一度ノ内ニ顕シテ、竹ハ中尊、娑婆ニテノ主也シ佐久間夫婦ハ両脇立ト成テ、今ニ有ト云云。此事、彼御山ノ佐藤宮内ト云神人語之

ここでは竹について、「江戸大伝馬町ノ名主佐久間善八ト云ケル者ノ召仕ナル竹ト云ケル下女」と説明されている。「玉滴隠見」の成立年代は不詳であるが、この記事の前後には寛永期（一六二四〜四四）の別内容の記事が記されており、本記事の内容も同時期のものと考えられる。近世前期の話がまとめられた本史料に、佐久間家の当主の名前が「佐久間善八」と正しく記されている点には、特に注目しておきたい。

それが一八世紀の記録になると、「佐久間勘解由」と記されるようになる。

○佐久間の竹黄金宮に生ず

江戸大伝馬町、佐久間勘解由召つかひの下女竹は、天性仁慈の志ふかくて、朝夕の飯、我分は乞丐人にほどこし、その身は、あがり膳のくひ残し、又は流しの隅に網をあて置、そのたまりし物を食し、つねに口にまかせて、称名してけり。ある時、頓死せしに、身も温なりしかば、若やはと、人々、守り居たるに、遂に蘇生したり。いかに冥途の事はと問ば、されば、いづくともなく広野を往しに、黄金の宮殿あり、仏ましまして、これは汝が来る台なりと、しめしたまへりとなり。扱その、ち、念仏いよいよ精進にして、

大往生をとげし。近所のもの、湯殿山に詣て、竹に逢たり。竹が曰、我は安養世界に住侍りし。おのおのまかならず念仏したまへ。又他をめぐむ心あらせよと云て、うせしとかや。竹、つねに綱をあてし流しは、今増上寺念仏堂心光院の門の天井にかけ有りけり。

これは、寛延二年（一七四九）に刊行された神谷養勇軒による随筆「新著聞集」<sup>(13)</sup>の記事である。ここでは「江戸大伝馬町、佐久間勘解由召つかひの下女竹」と記されているが、一八世紀になると本記事以外でも「佐久間勘解由」と記される事例が確認できるようになる。享保一二年（一七二七）に成立した大道寺友山による随筆『落穂集』にも「大伝馬町佐久間勘ケ由」<sup>(14)</sup>とあり、先にみた安永六年の略縁起でも佐久間家の当主が「勘解由」と記され、文化十一年（一八一四）九月に大伝馬町一丁目の木綿問屋の三名の太物行事がまとめた記録にも「三州地領之豪家佐久間勘解由」<sup>(15)</sup>とある。これらは、元禄一二年に佐久間善八が退転すると、佐久間家と馬込家が近しい間柄であったことも手伝い、やがて両家の当主の名前が混同されるようになったものと考えられる。つまり、竹が仕えた主人を佐久間勘解由（あるいは馬込勘解由）とするものは、この名前の混同によるものであり、正しくは、竹の主人は退転前の佐久間善八であったと考える<sup>(16)</sup>。

お竹大日如来の江戸での出開帳が最初に行われたのは元文五年（一七四〇）であるが、次にあげる史料は、馬込家の記録「旧記」<sup>(17)</sup>のなかで、その出開帳の実施について記された箇所である。

一、奥州出羽湯殿山のおたけ守り本尊大日如来之別当蓮台寺、当春中式三度被参、御先祖佐久間おたけ大日如来此度開帳願願罷出候、御先祖被召仕候者之儀ニ御座候間、先爰許江御届申候由二付、則逢候而成程御尤之事御勝手次第御願可被成由挨拶致遣、依之寺

社御奉行様江御願相済候由被申来、元文五年申五月中旬奥州江蓮台寺被帰、同六月廿一日開帳仏大日如来荒沢不働明王守り候而、先達而爰元役所迄御入申度旨蓮台寺願二付、任其意当日開帳本尊二鉢玄闕江居え、湯殿講中・蓮台寺并羽黒山山伏方立寄挨拶之上、開帳湯島天神江御出、七月朔日より閏七月晦日迄開帳有之候

江戸での出開帳に際して、開帳仏「おたけ大日如来」が先祖の下で働いていた竹に由来するということが、その大日如来を管理する蓮台寺の関係者が最初に馬込家を訪れたことが知られる。馬込勘解由は蓮台寺の関係者と会い、開帳の趣旨に納得して了承すると、それを受けて蓮台寺は神社奉行に開帳願を届け出た。そして実際に出開帳が行われた際には、お竹大日如来はこれを守護する不動明王とともにまずは馬込家の玄闕に置かれ、そこに湯殿講中、蓮台寺の関係者、そして羽黒山の山伏が挨拶に訪れてから、開帳場の湯島天神へ運ばれていったという。

佐久間家が馬込家の「御先祖」とされている点については、先にみた通り、佐久間家の娘が馬込家三代目の後妻となり、その後妻の娘が馬込家五代目の母にあたる。馬込家と佐久間家は縁戚関係にあり、佐久間家は馬込家の先祖といえる。出開帳の実施に至るまでの一連の経緯をみると、佐久間家と馬込家との縁戚関係、および両家とお竹大日如来との関係は、自他ともに知るところであり、お竹大日如来は大伝馬町の佐久間家および馬込家にゆかりの深い仏であったことを改めて確認できる。

なお、これまでに取り上げた史料では、竹にゆかりの山は「羽州湯殿山」<sup>(18)</sup>（玉滴隠見）、「湯殿山」<sup>(19)</sup>（新著聞集）、「奥州出羽湯殿山」<sup>(20)</sup>（旧記）とあるように、羽黒山ではなく湯殿山とされている。「玉滴隠見」の当該記事の最後には「此事、彼御山ノ佐藤宮内ト云神人語之」とある。この記事の話を伝えた具体的な語り手は「彼御山」の神人であると明示されており、その山の名称を間違えるとは考え難い。「玉滴隠見」では佐

久問家の当主の名前が「佐久間善八」と正しく記されていたこともふまえると、本史料の内容には一定の信用を置いてよいと考える。馬込家の「旧記」にも、同家を訪ねてきたのは蓮台寺であることが記され、江戸での出開帳に際しては湯殿講中が挨拶に来たとある。湯殿山の本地仏は大日如来、羽黒山は聖観音菩薩であり、竹の祀られる場所としては本地仏からみても湯殿山の方がふさわしく、竹は湯殿山と結びついて大日如来になったと考えられる。

それがなぜ、お竹大日如来が羽黒山の黄金堂に安置され、嘉永二年の縁起絵巻のように、竹の話に登場する山が湯殿山ではなく羽黒山になったのかは不詳である。先にみた馬込家の「旧記」に「当日開帳本尊二躰玄関江居え、湯殿講中・蓮台寺并羽黒山山伏方立寄挨拶之上、開帳湯島天神江御出」と記されていたように、出開帳の当日には羽黒山の山伏も馬込家まで挨拶に訪れていたことが知られる。当初から湯殿山と羽黒山が一体となってお竹大日如来を生み出し、出開帳を計画・実行したのか、あるいは湯殿山で生まれたお竹大日如来を羽黒山の山伏が利用したのか、実際の経緯は不明であるが、後掲の表1の通り、お竹大日如来の木版刷りの縁起は元文五年の第一回の出開帳から羽黒山黄金堂の別当玄良坊が作成している。また、安永六年の二回目の出開帳以降、開帳元が蓮台寺から玄良坊に変わっている（「はじめに」参照）。羽黒山玄良坊は早くから出開帳にかかわっており、少なくとも第二回の出開帳の頃には、玄良坊が中心となっており、お竹大日如来の像や堂の維持、および出開帳の実施を担っていたと考えられる<sup>(19)</sup>。

次に、竹の没年についてであるが、先にみた嘉永二年の縁起絵巻や史料1などでは、竹は寛永一五年（一六三八）三月二日に亡くなったとされている。しかし、文政八年（二八二五）三月に山崎美成（好問堂）が記した「於竹大日如来縁起の弁」には、「浅草新寺町獅子吼山善徳寺に、如意輪観音の石塔あり。性岸妙智信女、延宝八庚申天（一六八〇）五月

十九日と彫刻したり。はお竹が墓なりと云ふ<sup>(20)</sup>とある。お竹の墓とされる石塔は、現在も馬込家の菩提寺である善徳寺にあるが、その石塔の背後には「五月十九日」の日付が確認され、石塔の横に建てられた比較的新しい石柱には「お竹大日如来尊影 延宝八年五月十九日上天せらる」とある<sup>(21)</sup>。

先にみた「玉滴隠見」のお竹大日如来に関する記事の内容が寛永期のものと考えられ、その記事に「去年三月廿一日二死シタリ」とあることや、嘉永二年の縁起絵巻などにおいて寛文期（一六六一―七三）に竹の等身像が安置されたと記されていることを考え合わせると、竹の没年は寛文期以前の寛永一五年三月二日である可能性が高いと考える<sup>(22)</sup>。ただし、かつては佐久間善八が所持した町屋敷に店を構えた紙問屋の小津家には、お竹大日如来の木像が伝わり、関東大震災で焼失するまでは毎年一九日の命日にその木像が開帳されたという<sup>(23)</sup>。なぜ寛永一五年三月二日と延宝八年五月一九日の二説が成立したのか、竹の没年をめぐってはさらなる検討を要する。

竹の出身地についても、湯殿山あるいは羽黒山とする説のほか<sup>(24)</sup>、後掲の表2の通り奥州、上総国、神奈川など、諸説ある。嘉永二年の縁起絵巻には「生国も詳ならず」とあり、竹の出身地は不明とされている。

以上の通り、竹に関する情報は、出身地、仕えた主人の名前、没年など、いずれも厳密な正確さに欠けると指摘できる。お竹大日如来をめぐっては、ある女性の臨死体験という江戸で起きた不思議な出来事<sup>(25)</sup>が、巫女の多く存在する羽黒山に伝わり、そこで竹の伝説が生成されたという興味深い仮説も提起されている<sup>(26)</sup>。お竹大日如来は、由来や成り立ちに正確さを欠きながらも、江戸と出羽（羽黒山・湯殿山）との間でつくりあげられ、人びとに広く受容される神仏になったと考えられる。

## ② 開帳と出版物

お竹大日如来の出開帳が江戸で行われた折には、さまざまな出版物が  
 発行された。その出版物は、開帳仏の説明をするために開帳元の寺社が  
 作成したものと、寺社とは関係のない第三者の手になるものに大別され  
 る。

仏教関係の儀礼執行の場である法会では、仏神を呼び寄せる勧請、仏  
 神に所願成就を祈願する表白など、さまざまな言葉が述べられるが、こ  
 うした仏教関係の語りには、法語には法語の、説教には説教の、独特の  
 ふしがある<sup>(27)</sup>。お竹大日如来の江戸での出開帳の折に寺社の側で作成され  
 た木版刷りの縁起は、来場者に開帳仏の説明をするための絵解きの台本  
 として使用されたという。

表1は、江戸での出開帳のときに寺社側（羽黒山玄良坊）で作成され  
 た、お竹大日如来の縁起である。第三回の文化一二年（一八一五）の出  
 開帳のときの縁起がないが、これは作成されなかったのではなく、現  
 存が確認されていないと考えた方がよいであろう。第四回の嘉永二年  
 （一八四九）の出開帳の際には、版本と絵巻の二種類の縁起が作成され  
 ているが、来場者への絵解きは版本で行い、絵巻はほかの宝物類ととも  
 に壇上に陳列されたと推定されている<sup>(28)</sup>。出開帳を行う寺社の側では、開  
 帳に合わせてこうした縁起を作成し、開帳仏の由来やご利益を独特の絵  
 解きの口調で来場者に説いたのである<sup>(29)</sup>。

これらの縁起について、第一回の元文五年（一七四〇）と第四回の嘉  
 永二年の竹についての内容はほぼ一致するが、第二回の安永六年  
 （一七七七）の縁起は、内容年代が「文禄年中（一五九二〜九六）の頃」  
 とされ、竹の主人を「武江大伝馬町何某<sup>(今云)</sup>」<sup>(30)</sup>「勘解由<sup>(かかげゆ)</sup>」とし、竹の像  
 の安置先が「羽州湯・月・羽黒三山霊場の麓<sup>(しか)</sup>」<sup>(31)</sup>とされるなど、異なる

表 1 羽黒山玄良坊が作成した於竹大日如来の縁起

表題	年代	作成者	種別	内容年代	主家		没年	生国
1 於竹大日如来縁起	元文 5.4.8	出羽国羽黒山麓黄金堂於竹大日如来別当玄良坊仲真	版本	元和寛永	江戸 / 大伝馬町	佐久間某	寛永 15.3.21	
2 応現於竹大日如来略縁起	安永 6.7.-	出羽国羽黒山麓別当玄良坊	版本	文禄	武江大伝馬町	何某(今云馬込) / 佐久間氏何某 / 勘解由		
3 於竹大日如来霊宝之語	(嘉永 2)		版本	元和寛永	江戸大伝馬町	佐久間何かし		
4 於竹大日如来縁起 三卷	嘉永 2. 閏 4.-	(出羽国田川郡羽黒山玄良坊弘道阿闍梨)	絵巻	元和寛永	江戸 / 大伝馬町一丁目	佐久間某	寛永 15.3.21	不詳※

出典：1・2・3 戸川安章「羽黒山の語りもの—お竹大日絵解きを中心に—」(『絵解き研究』9, 1991年), 4本文註(2)参照  
 注1) 3「於竹大日如来霊宝之語」には作成者が記されていないが、戸川論文では1・2・3とも本文半紙三枚くらいの簡単な略縁起として玄良坊が刊行し、絵解きの台本として使用したとしている。  
 注2) 4「於竹大日如来縁起」には、竹の出生について※「竹女といへるは其生国も詳ならず、父母の名も知る人なかりき」とある。

表2 お竹大日如来の錦絵

表題	絵師	名主印		主家		内容年代	没年	生国	出典		
		名主名	年代	町名	名前				a	b	c
1 孝貞女鏡 竹女	貞秀	村松	天保14-弘化4					奥州	34		42
2 賢女烈婦伝 婢竹女	国芳	吉村	天保14-弘化4		なにがし				45	83	41
3 於竹大日如来略縁起	国輝	米良・村田	弘化4-嘉永5	東都大伝馬町	佐久間某		寛永15.3.21		27		
4 北陸出羽国安置於竹大日如来	国輝	米良・村田	弘化4-嘉永5	江都 / 大伝馬町	佐久間何某		寛永15.3.21	上総国	28		
5 於竹大日如来の由来	国麿	村松・福島	弘化4-嘉永5	江戸 / 大伝馬町	佐久間何某	寛永		上総国	29		
6 於竹大日如来の由来	国麿	米良・村田	弘化4-嘉永5	江戸 / 大伝馬町	佐久間何某	寛永		上総国	30		47
7 お竹大日如来	国麿	村松・福島	弘化4-嘉永5							89	48
8 於竹大日如来だい所どうぐさんけいのづ	国芳	米良・村田	弘化4-嘉永5	東都大伝馬町	何某				35	84	44
9 (無題) (下女如来障子へうつる法のかげ)	国芳	米良・村田	弘化4-嘉永5	城東の駅	旧家何某				36	88	45
10 婢女於竹之説	国芳	米良・村田	弘化4-嘉永5	東都	何某			加奈川	37		
11 於竹大日如来由来	国芳	村松・福島	弘化4-嘉永5	東都大伝馬町	何某			神奈川	38	87	43
12 於竹大日如来	国芳	村松・福島	弘化4-嘉永5						40	86	
13 (無題)	国芳	吉村・衣笠	弘化4-嘉永5	武州豊島郡宝田	佐久間某	むかし			39		
14 於竹大日如来の伝	国芳	吉村・衣笠	弘化4-嘉永5	武州豊島郡宝田	佐久間某				46	85	46
15 於竹大日如来略縁起	貞秀	馬込・浜	弘化4-嘉永5	東都 / 大伝馬町	佐久間某	元和 寛永			32		
16 列婦於竹か伝	関斎	吉村・衣笠	弘化4-嘉永5		佐久間某					91	
17 婢女於竹之説	豊国	浜・村松	弘化4-嘉永5	東都大伝馬町	何某			加奈川	33		
18 於竹大日如来之由来	芳虎	吉村・衣笠	弘化4-嘉永5	大伝馬町	佐久間何某				31	90	

出典 : a 『江戸の旅と流行伝—お竹大日如来と出羽三山—』(板橋区立郷土資料館, 1992年)  
 b 『特別展浮世絵師たちの神仏—錦絵と大絵馬に見る江戸の庶民信仰—』(渋谷区立松濤美術館, 1999年)  
 c 『大伝馬町名主の馬込勘解由』(東京都江戸東京博物館, 2009年)  
 注1) 出典欄の番号はそれぞれの図版(口絵)番号。  
 注2) 7は二枚続き。  
 注3) 12は2種類の図柄が現存する。本図については本文参照。  
 注4) 18の主家(町名)欄の「大伝馬町」は異筆。



表3 お竹大日如来を題材とした創作

書名	作者	年代		備考
金鉢両夫大日御伝記※1	丸屋九左衛門	元禄中期か		
於竹大日利生記	蓬萊山人亀遊	安永6	1777	安永6年：第2回江戸出開帳
於竹大日忠孝鏡	式亭三馬	文化7	1810	全7巻、各巻5丁、91200564-91200570
お竹大日如来稚絵解	十返舎一九	文化12	1815	文化12年：第3回江戸出開帳
お竹一代黄金花桜木双紙	玉蘭斎主人	弘化2・3	1845・46	全4巻、前編上下・後編上下、各巻10丁、96200777-96200780
応現於竹物語	緑亭川柳	嘉永2	1849	嘉永2年：第4回江戸出開帳
お竹大日如来※2	河竹黙阿弥	元治元	1864	別称「孝女お竹」、正称「双蝶色成曙」
於竹大日如来霊験記	曲亭馬琴			表紙のみ、02152430

注1) 備考欄に8桁の数字があるものは、東京都江戸東京博物館所蔵（「於竹大日如来霊験記」は寄託）。

注2) 上記以外は本文註(2)のデータベース内の「お竹関連資料（お竹関連文献）」を参照した。

注3) ※1は古浄瑠璃正本。※2は歌舞伎、年代は初演年次。

記載がみられる。第二回の出開帳は、開帳元が蓮台寺から玄良坊に変わっており（「はじめに」参照）、そのことが関係した可能性も想定されるが、実情は不明である。

一方、江戸での出開帳の折には、寺社による出版物だけではなく、寺社以外の第三者による出版物も数多く出回った。表2は、現存が確認されているお竹大日如来の錦絵の一覧である。表中の3〜18の錦絵は、刊行年代が弘化四年（一八四七）から嘉永五年（一八五二）の間であることから、嘉永二年の出開帳に合わせて作成・販売されたものと考えられる。お竹大日如来の出開帳では、嘉永二年の四回目の出開帳のときに大量の錦絵が出版されたことを確認できる。

ただし1と2の版行年代は第三回と第四回の出開帳の間の時期であり、お竹大日如来の錦絵は出開帳のない時期にも作成されたことが知られる。1は「孝貞女鏡」、2は「賢女烈婦伝」という、いずれも連作物の一つであり、前者では衣手、後者では常盤御前など、複数の女性とともに取り上げられている<sup>33)</sup>。表3はお竹大日如来を題材とする創作の一覧である。十返舎一九などの著名な作家が作品を手がけているが、式亭三馬の「於竹大日忠孝鏡」が文化七年（一八一〇）に刊行されているように、出開帳とは関係のない年に出版されたものも確認できる。お竹大日如来の錦絵や読み物は、出開帳のない時期にも出回っており、これらを通してお竹大日如来は普段から江戸の人びとに広く知られていたと考えられる<sup>34)</sup>。

表2に戻ると、お竹大日如来の錦絵を制作した絵師には、橋本貞秀、歌川国芳、歌川国輝、歌川国麿、一簾亭関斎、歌川豊国、歌川芳虎という、歌川派の著名な絵師が名を連ねている。ここではこれらの中でも9の国芳作の錦絵に注目する。史料2はその錦絵である<sup>35)</sup>、詞書には、ある夜、竹が針仕事をしており、同宿の男がその様子をこっそりうかがっていると、灯火が光り輝き、まるで如来が現れて凡夫を教化するかのよ



史料2 「(下女如来障子へうつる法のかけ)」

うであったと記され、最後に「下女如来 障子へうつる 法のかけ」という狂句が添えられている。国芳の絵には、針仕事をする竹と障子越しにのぞいている二人の男、そして障子にうつる如来の姿をした竹の影という、詞書と合致した内容が描かれている。

本稿の「はじめに」で示した史料1は、『懐溜諸層』に貼り込まれた墨一色の一枚摺である。版元や作者は不明であるが、史料2の国芳の絵とよく似ている。史料2の二人の男(凡夫)が史料1では剃髪になっているが、これは史料1の詞書の内容に合わせて、二人の男が「戒行堅固のひじり」と「玄良坊宣安」に置き換えられたものと理解できる。史料1の詞書には、絵の内容通り、聖と宣安がひそかに竹の部屋をのぞき、竹の姿を拝むと竹の全身から光明が放たれたと記されている。しかし、竹の針仕事については「仕たてものなどハ一日二ひとへもの十まい余縫ひけり」などであるが、二人の男がのぞいたときに針仕事をしていたとは記されていない。また、竹の影が如来の形をしていたことも述べられ

ていない。絵と詞書の内容がより合致しているのは史料2であることから、史料2が先に成立し、その絵の構図を取り入れて史料1が制作された、つまり人気絵師の国芳による絵を参考にして、史料1が作成されたと考えられる。

江戸の錦絵は庶民から大名まで幅広い購買層を有したが、単色墨刷りで簡易な一枚摺は錦絵より廉価でより広く深く庶民層に行き渡った。嘉永二年のお竹大日如来の出開帳に際しては、後者の廉価な一枚摺に、有名絵師の作品の模倣によって制作されたものがあつたわけであるが、江戸時代には現在の著作権に相当する考え方はほとんどなく、売れると見込まれる印刷物は、無許可・非合法ではあるが、すぐに模倣され広く販売された。お竹大日如来の出開帳に際して、多くの著名な絵師が錦絵の制作に関わっただけでなく、それらの構図を模倣した廉価な一枚摺も出回ったということは、お竹大日如来はそれだけ高い人気があつたことを示していると考えられる。

表2の錦絵に関して、ここでは12の国芳作の錦絵にも注目しておきたい。史料3はその錦絵で、右上に「於竹大日如来」、左上に「一切衆生もろくの願をかける」と記され、①の中央には上半身が竹、下半身が如来の姿をしたお竹大日如来、絵の下半分には様々な願いごとをする人びとが描かれている。①は表2の出典にある図録などによりすでに知られる錦絵であるが、この絵には②のように上部の詞書と絵の下半分は①と同じで、中央のお竹大日如来が着衣を脱ぎ捨て完全な大日如来になった姿で描かれている版があることが判明した。この錦絵は少なくとも二枚組の続き物で、下働きの竹が実は大日如来であつたことを効果的に示す、国芳の工夫が凝らされた作品であつた。現存するのは①と②の二枚であるが、史料3にはあるいは①の前に全身が竹の姿をした版があり、三枚続であつた可能性も想定できる。同じく国芳の作品である表2の8の錦絵も、中央上部に描かれたお竹大日如来は、左半身(向かっ



史料 3 - ② 「於竹大日如来」



史料 3 - ① 「於竹大日如来」



史料 4 「於竹大日如来だい所どうぐさんけいのづ」

御詠文作認所 代作屋代作  
御認物取次所 文飛堂文飛

- 一 神佛開帳縁起類  
神邊西郡信濃有俊美実の御出立  
古く國史中書經文の考證件
- 一 諸高賣開店御披露  
新規時之文、再興四書文の引札  
の文、出立の文、柱文の考證件
- 一 一物見世物口上  
生心執安の造り、志解等、御出立の  
考證件、中、和傳、妙方の傳本、出
- 一 寶藥能書引札類  
人々の長短、西始、御出立

右の外詩歌連俳和漢の文章、更々、後、存人情、本、草、州、紙、葉、  
無、持、書、教、生、等、各、用、の、年、に、連、書、代、作、の、法、は、又、是、り、淨、船、理、  
の、對、文、句、義、入、往、言、諸、社、祭、礼、の、思、付、口、行、燈、の、上、儀、等、當、局、爲、  
御、向、を、相、後、に、仕、書、文、作、の、考、證、件、と、し、て、考、證、件、と、す、

五、習、地、邊、呼、類、或、は、學、教、制、の、純、印、諸、同、脚、藏、取、數、技、品、等、  
儒、家、書、家、畫、家、鏤、筆、家、詩、文、家、和、歌、家、  
非、家、狂、句、家、戲、作、家、劇、場、作、家、繪、家、備、筆、家、

右、海、内、緒、文、先、生、方、喜、禮、物、古、物、下、直、書、文、取、中、書、信、等、  
古、書、種、の、近、世、書、等、の、同、合、せ、中、に、東、都、さ、り、也、諸、國、の、歌、  
俳、句、の、宗、匠、方、の、中、時、の、對、縁、入、用、の、年、信、等、  
倡、妓、封、問、女、樂、中、に、小、頭、雅、才、の、芳、君、少、御、出、立、等、御、出、立、  
短、冊、扇、面、不、限、歌、俳、句、冠、付、古、花、体、信、紙、子、取、近、に、連、書、用、紙、等、

古、流、盆、石、指、南 和、漢、  
種、名、數、品、  
店、  
日本橋本原店角  
代作屋文飛

銅印、石印、風鎮、風磨、等、之、短、冊、掛、文、房、具、類、其、外、細、物、品、

史料 5 「日本橋代作屋文飛」(贈物代作引受につき引札)」

て右半分)が竹の姿、右半身(向かって左半分)が大日如来の姿で描かれている(史料4)<sup>(40)</sup>。竹から大日如来への変身の過程を示すものであるが、これにも前後に続き物の版(全身が竹のものと全身が大日如来のもの)が存在した可能性もある。このように、国芳はお竹大日如来の錦絵にさまざまな趣向を凝らしていたのである。これにより出開帳の宣伝効果は高まり、錦絵の販売は促進されたと考えられる。

ところで、嘉永二年の出開帳の折に流布した錦絵や単色墨刷りの一枚摺には、お竹大日如来の由来やご利益などを簡潔に説明した詞書が記されている。表2の詞書の内容をみると、竹の主人の表記の仕方(なにがし、佐久間某、佐久間何某、何某、旧家何某)、内容年代(寛永、むかし、元和寛永)、竹の生国(奥州、上総国、加奈川)など、内容や表記は一樣ではなく、複数の書き手の存在が想起される。

このような詞書がどのように記されたのかについて、『懐溜諸屑』には史料5の引札が貼り込まれており、詞書の成立事情の一端を知る一助となる。史料5の冒頭にある「御詠文作認所 代作屋代作」とは、近世後期に活躍した戯作者・狂言作者の花笠文京である。<sup>(41)</sup> 文京は「御詠文作認所」の看板を掲げて、広く一般の人からの文章の注文にも応じる代書屋あるいは宣伝屋のような仕事を行っていたという。<sup>(42)</sup> 当時の戯作界では、例えば為永春水の人情本は春水単独の作ではなく、門人たちが助作として動員されているが、春水単独の名義で刊行されたと指摘されている。文京は、こうした助作や、自身の名義とは異なる名前を代作を行う戯作者の典型とされている。<sup>(43)</sup>

この代作屋の引札をみると、代作可能な文章の一つに「神仏開帳縁起類」があげられ、「神道、両部、浮屠、方便、靈宝のゆらい等にいたるまで、国史、神書、経文のうちより考証仕候」とある。お竹大日如来の錦絵や単色墨刷りの一枚摺に記された詞書が花笠文京によるものかどうかは不詳であるが、文京あるいは類似の業者が作成したものが含まれ

る可能性は高いと考える。詞書の内容が一樣ではなかったことから、こうした業者は複数存在したと推定される。お竹大日如来の錦絵をはじめとする一枚摺が江戸で数多く版行された背景には、代作業者、つまりは多くの無名の戯作者による縁起等の代作があったとみられる。お竹大日如来の由来や成り立ちは、その内容に厳密な正確さを欠いていたが、こうした代書を行う複数の業者が販売目的の縁起を作成することで、その傾向は助長されたと考えられる。<sup>(44)</sup>

### ③ 信仰と娯楽

史料1の「於竹大日如来縁記」<sup>(45)</sup>は、幕末の江戸で活躍した落語家の入船扇蔵が収集した約三四〇〇点の摺り物を貼り合わせた『懐溜諸屑』に貼り込まれていたものである。本節では、この『懐溜諸屑』にある「於竹大日如来縁記」に関連する摺物を取り上げ、江戸の人びとと神仏との関係を考える。

表4は、『懐溜諸屑』に貼り込まれていた、江戸での開帳の折に版行された一枚摺をまとめたものである。江戸の住人である入船扇蔵は、お竹大日如来以外にも日蓮宗総本山の身延山や成田不動尊など、さまざまな寺社が実施する開帳の機会に接しており、その開帳のたびに多様な一枚摺を入手していたことが知られる。

これらのうち、史料6は「成田不動尊開帳奉納附」、史料7は「江之島大弁財天開帳御着の図」、史料8は「身延奥院開帳収納高」である。開帳時には「於竹大日如来縁記」のように開帳仏の由来を説くものだけでなく、江戸の人びとによる奉納金や奉納物(史料6)、開帳仏が到着した時の様子(史料7)、そして出開帳による寺社の収益(史料8)など、さまざまな内容が一枚摺で取り上げられたことが知られる。

史料9は、安政四年(一八五七)の上総国の芝山仁王尊の出開帳に合

表4 開帳の一枚摺

地域	史料名	年代	摘要	番号
出羽	於竹大日如来縁起	嘉永2年(3月25日から60日間)	史料1/ 両国回向院に於て開帳 / 出羽国飽美郡羽黒山黄金堂	15-47
江戸	市谷茶の木稲荷大明神御開帳奉納番附	天保9年4月(3月1日より60日間)	板元森屋治兵衛	15-42
	東都千駄ヶ谷新日暮開帳奉納書画堂略図※	天保10年初夏(4月1日より60日間)	発願主吉野屋茂兵衛・植木屋金太郎	16-68
武蔵	(武州大相模真大山大聖寺不動明王由来)	(安政2年2月)	別当大聖寺	23-88
上総	上総芝山仁王尊御利益図	安政4年4月(1日より60日間)	両国回向院にて開帳 / 火難・盗難を除き、疫疾をはらふの利益	3-124
	おかひてう落しばなし(芝山仁王尊開帳)		史料9 / すまひ / 江戸けんぶつ / かうまんもの / とうぞく	3-102
下総	成田不動尊開帳奉納附	安政3年3月20日より(60日間)	史料6	7-44
	総州成田山絵図			5-227
相模	江之島大弁財天開帳御着の図	(安政3年)8月9日より60日間	史料7 / 深川八幡社内 / 諸講中出向(迎)ひ	7-67
	(1200余講賑 / 当7月27日御着道順)			7-66
甲斐	灯籠仏縁起(甲州善光寺)	(天保7年6月1日より60日間)	甲州善光寺	5-75
	身延奥院開帳取納高	嘉永2年7月6日より9月20日(7月19日より60日間)	史料8 / 於深川浄心寺 / 7月6日御着御より9月20日惣供養迄 / 身延会所	16-67
	身延宝蔵開帳取納高	安政4年7月3日より9月20日(7月19日より60日間)	於深川浄心寺 / 7月3日御着御より9月20日惣供養迄 / 身延会所	20-16
	身延山開帳奉納附	安政4年7月19日より(60日間)		20-6

出典：『懐溜諸屑』(国立歴史民俗博物館所蔵)、番号はH-1492以下に続く番号。

注1) 年代の括弧書きは、比留間尚「江戸開帳年表」(西山松之助編『江戸町人の研究』第2巻、吉川弘文館、1973年)による。

注2) ※は千駄ヶ谷聖輪寺の如意輪観音の開帳時のものと考えられる(上記「江戸開帳年表」参照)。

注3) 江戸の開帳は居開帳、その他は出開帳である。

わけて版行されたと考えられる「おかひてう落しばなし」(御開帳落咄)である。ここには「すまひ」(相撲)、「江戸けんぶつ」(江戸見物)、「かうまんもの」、「とうぞく」(盗賊)という四つの小咄が記されている。最初の相撲の小咄は、以下の通りである。

すまひ

「芝山仁王かいてうにきたり、浅草のくわんぜおんハ、なりハちいさいか、こうげつなものだとき、すもうをとらんと日げんをきめ、角力をはじめると、そうほうしたくおしてどひやうへあがり、仁王さんハ四かうをふんで大ぢおふミならすゆへ「けんぶつ」くわんおんさまハおなりがちいさいからけんのおんさまだといふと、「仁王が四かうおふんてか、つても、こつちハ五くわうおさしてか、るから大せうぶた

出開帳で江戸に来た芝山仁王尊が、浅草寺の観音と相撲をとることになった。大きな芝山仁王尊が豪快に四股を踏むのを見て、見物人が、浅草観音は小さいから危うい(「けんのおん」は「険難・剣呑」で危険・不安だと思ふさまの意)と心配すると、仁王尊の「四」股に対して浅草観音は「五」光(後光)がさしており、「四」よりも「五」の方が大きいから、浅草観音は大丈夫という落ちである。「観音」と「険難・剣呑」、「後光」と「五光」をかけた小咄である。

この一枚摺は落語家らしい収集品ともいえるが、ここでは開帳仏が信仰の対象としてではなく、娯楽の眼差しでとらえられている。すでにみた通り、開帳時には開帳仏の御利益に預かるうという信仰的な側面だけではなく、開帳仏に奉納された金品(史料6)や、出開帳による寺社の収益(史料8)という世俗的な事象にも、江戸の人びとの関心が集まっていた。江戸における神仏の開帳が娯楽や世俗の要素を多分に持ち合わ

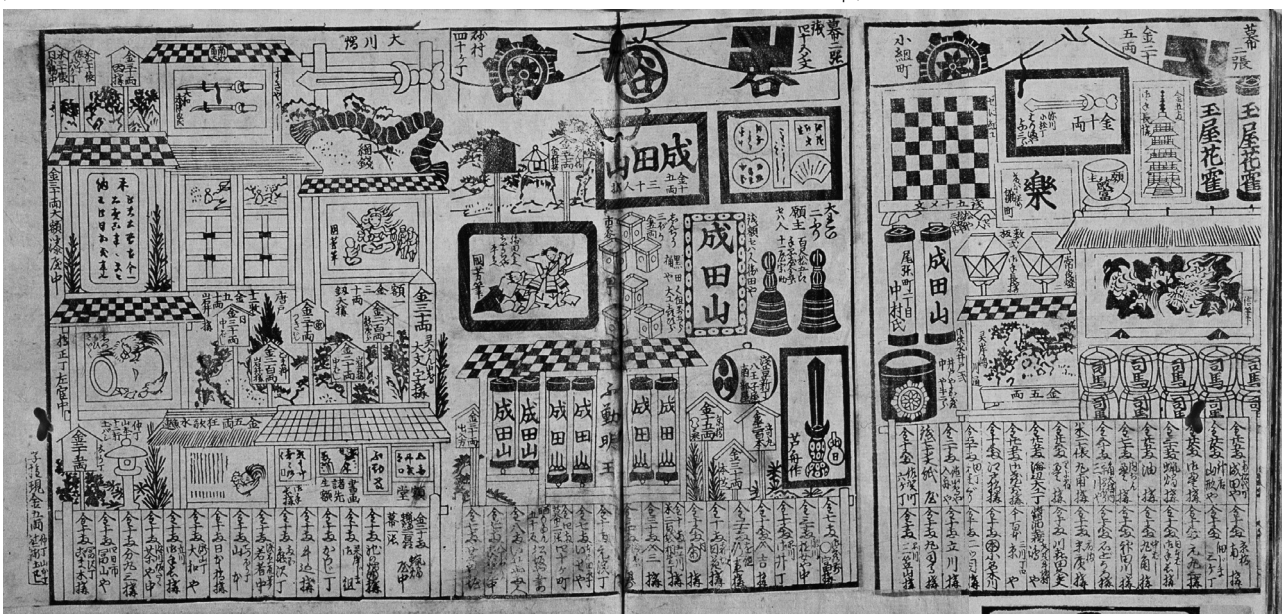
(2)

(1)



(3)

(2)



史料 6 「成田不動尊開帳奉納付」

(1) (2) (3) の順に貼りこまれている



史料7「江之島大弁財天開帳御着の図」

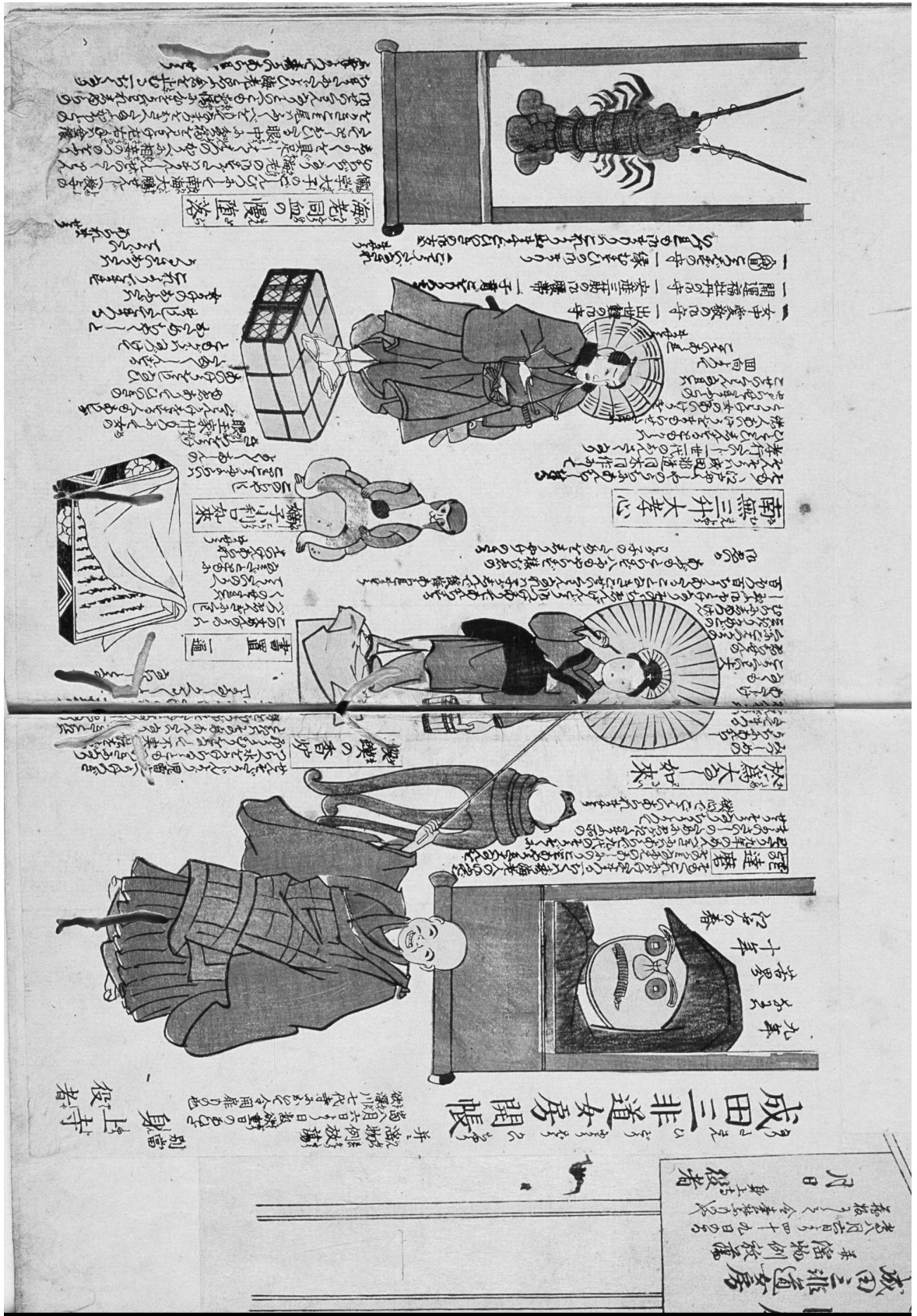
身延 眞院 開帳 於深川深心寺七月六日 所着御九月廿日總修養正 收納高	所 掛錢 一錢六百七貫文	祖 西御寶前 一錢三百七兩三分計奉 錢貳千五百三拾貳貫九百拾文 玉銀百拾貫	七 御寶前 一錢九拾七兩三分 錢貳千五百四拾六貫五拾拾文 玉銀八 所 千五百九拾	官 御靈寶 一錢貳拾七兩壹分 錢七百拾貳貫百五拾六文	日 祭場 一錢拾七兩貳分 錢五百八拾三百拾壹文 玉銀貳 所 壹萬一千三百拾壹文	本 三勸化所 一錢貳百八拾三兩三分計奉 錢三百八拾五拾拾貳文 玉銀四 所 五百七拾七袋	會 所 一錢三千六拾八兩三分 錢四百七拾九貫八拾八文 白銀貳拾玖所 玉銀百拾三 所 三千壹拾壹袋	兒 御手傳 一錢三拾五兩 一錢貳拾八兩貳分 所 施主 何某 會所 蒸籠代	惣 收納高 一錢三千八百八拾六兩貳分 錢七千五百九拾三貫八拾八文 白銀貳拾玖所 玉銀百拾三 所 金貳拾壹兩	前 入用 一錢九百兩也	諸 拂高 一錢千百拾兩、錢六百拾文	差 引高 一錢三千六拾五兩貳分、錢三百九拾三文	寄 高 一白米四拾貳俵 袋數壹萬八千三百八拾拾袋	右之通島豆相遠 嘉永二己酉年秋九月 身延 會所
--	--------------------	---	--	-------------------------------------	---	---	---	--	--	-------------------	-------------------------	-------------------------------	-----------------------------------	----------------------------------

史料8「身延眞院開帳收納高」





史料 9 「おかひてう落しばなし」



史料 10 「成田三非道女房開帳」

表5 神仏を滑稽化した一枚摺

表題	内容	番号
これハこれハとんだ霊宝	ずるま大酒 / 蚊やのかかりに紙帳菩薩 / でんぼう大師ぎやうきほさつの合作身のひまのぞんざい天 / 我慢仙人 / 客衆小利口如来 / やつかい仙人 / 忠義ほさつ義心さうづ合作大忠義等明王 / 食滞脾虚菩薩 / 一勇斎国芳戯画	10-36
泪如来の損像	山の宿聖天町にて有頂天五十日の間開帳 / 北国伝来なみだ如来 / 新ぞうほさつ / かむろ童女 / ※善光寺、絵解き鮎、弘化4年(1847)善光寺地震	11-42
由来記	開帳 / 左官無二如来 / 家根之瓦土蔵菩薩 / 右十月二日夜より普請中 / 毎朝乎間銭を [ ] 者也 / 執事職人 / ※安政2年(1855)10月2日安政江戸地震	11-43
成田三非道女房開帳	史料10 / □ここの達磨 / 於為大なし如来 / 南無三升大孝心 / 蝦蟆の香炉 / 書置一通 / 嫡子小利口如来 / 海老同血の慢墮落 / ※嘉永7年(1854)8代目市川團十郎の自死	14-13
とんだ霊宝	おどけ開帳 / 江勢岡宿大倉山洒落寺 / 本尊江戸太国天 / 并ニ三升子團十良官 / 三重之玉塔(家具丞相之霊像南無慈童大所作仕) / 仮宅おいらん上人(出判帳画本縁恋路如来夜鷹前之霊像) / 大坂細工人松本嘉兵衛	20-23
(れいほう・内れいほう)	れいほう(みな小丸のなみだ仏・町々昼夜廻々の小仏・地主入用大にそん像・大屋たいりつのごばん) / 内れいほう(役人中ぬれ手で阿波守唯取の太刀・面の皮厚めん・世に出ぬ長刀) / 天保十二年丑閏正月三十日ヨリ日数五拾日のあいだ上野山内において開てうじ奉るものなり / 芝さんざん山道しやう寺	24-43
(不順山悪水寺陽気不同妙王)	病名フレラモロヒス / ミもちあしき人々にわたつた三日のうちころりと御罪をあてたまひ忽ちとたんのくるシミを与七命を落す故ようぜう専一と守らせふ / 開帳(日数土用あけよりひかまへ頃迄十五六日の間にてなり) / ※安政5年(1858)コレラ大流行	26-12

出典：『懐溜諸屑』（国立歴史民俗博物館所蔵）、番号はH-1492以下に続く番号。

せたことはよく知られているが、『懐溜諸屑』の摺物からも同様のことを指摘できる。

表5は、『懐溜諸屑』の中で神仏を滑稽化した一枚摺の一覧である。「成田三非道女房開帳」（史料10）は「成田山不動明王開帳」をもじったもので、この中に「お竹大日如来」ならぬ「於為大なし如来」（おためだいなしわらい）が描かれている。

於為大なし如来

みづしめのうちにあんちしたてまつるそんぞうハ、かたじけなくもこうくわい上人、ゑちせんのかごはつかうのミぎり、かめどのむらにしゆつげんし玉ふ御ほとけなり、その、ちゑんげんどう御つげありてあんちする、百ほつ百ちうあたることなきごせいくわんなれハ、子がしんで後悔あられませう

この一枚摺は、嘉永七年（一八五四）八月六日に歌舞伎役者の八代目市川團十郎が大坂で自死したことを受けて、作成されたものである。右上の看板には「当八月六日より四十九日の間」とある。人気役者の突然の自死の原因は不詳であるが、当時の人びとは、七代目である父の愛妾「ため」が実子の猿蔵を團十郎にするため、八代目を窮地に追い込んだなどと思ひ込んだという。<sup>(46)</sup>「於竹」をもじった「於為」はこの愛妾を指しており、この一枚摺は、人びとがよく知るお竹大日如来などの神仏に仮託して、團十郎の自死を取り上げている。

表5にはこのほかにも、弘化四年（一八四七）の善光寺地震と関係するとみられる「泪如来の損像」や、安政二年（一八五五）の安政江戸地震を取り上げた「由来記」などもある。神仏を滑稽化し、眼前の厳しい状況をおかしみに替えて乗り越えよう（やりすごそう）とする江戸の人びとの気質を読み取ることはできようが、神仏にすぎたる切実な思いや、

神仏に対する厳肅な態度はみられない。

表5にある「とんだ霊宝」とは、開帳された仏像や霊宝に模して、頭・手足・台座などを魚介の乾物や野菜などで細工し、それを見せて興行した見世物である。安永六〜七年（一七七七〜七八）に両国広小路で行われた興行が大評判となったことはよく知られている。表5にお竹大日如来の「とんだ霊宝」はないが、実際にはその一枚摺が版行されたことが確認されている（史料11）<sup>(48)</sup>。

そも〜これに安置し奉つるハ、お竹大日如来一躰分身の御仏にて、台所山庖厨寺の本尊雜器如来の尊容なり、人間朝夕の食物を調へ弁じるに、利益あるによつて、大家小家に限らず、殖生の小屋の隅々まで、その霊在まさることなし、因てこれを大日用菩薩と申す、およそ貴きとなく賤きとなく、食を以て命を繋ぐ、若この菩薩在さざる時ハ、食用を弁じがたく、霊宝ハひだるい〜といふべし、故に尊卑貴賤にか、ハラらず、日月と俱に尊信し給ふべし、中にも御面相ハ酒興上人一刀三札の御作にて、盃を以て口とし、散蓮華を以て耳とし、爛酒瓶を以て鼻とし、手鍋を以て眼とす、信心の御方ハ近うよつて、徳利と御拝あらませう

これは史料11に記された詞書である。佐久間家の台所で水仕事などをしていた竹に仮託して、とんだ霊宝は大日如来の分身「大日用菩薩」とされ、その像は盃、蓮華、徳利、鍋という食器や台所用品でつくられている。詞書の最後に「とつくりと拜んで下さい」（徳利と御拝あらませう）とあるように、機知に富む記述が随所にみられる。江戸の人びとは、実物の「お竹大日如来」と「とんだ霊宝」をともに観覧し、楽しさを増幅させたことであろう<sup>(49)</sup>。

江戸の人びとの間で信心と遊樂が一体化していたこと、仏像や仏画と



史料11 「とんだ霊宝」

いう神聖なものが滑稽化されることに抵抗感がなかった(問題視されなかった)ことは、これまでも指摘されてきた。本節ではその点を『懐溜諸屑』に収録された一枚摺という視点でみてきたが、こうした信仰と娯楽の混在、聖と俗の混交という現象に、巷間にあふれる出版物が密接に関係し、その現象をより進行させるのに一役買ったと考えられる。

## おわりに

お竹大日如来は、由来や成り立ちに厳密な正確さを欠きながらも、江戸や出羽の人びとの間でつくりあげられ、広く受容される神仏となった。そのお竹大日如来の四回目的の出開帳が江戸で行われた嘉永二年(一八四九)には、多様な出版物が版行されたが、錦絵をはじめとする販売目的の出版物に記された縁起は記述が一定せず、内容の正確さは助長されたと考えられる。

また出開帳では(あるいは出開帳のないときでも)、お竹大日如来は信仰だけではなく、ともすると信仰以上に娯楽としての役割を期待された。お竹大日如来に関する創作が著されたり、お竹大日如来を「おためだいなしわるい」と滑稽化したり、大日如来ならぬ大日用菩薩を食器や台所用品で制作し見世物(「とんだ霊宝」として展示したりするなど、お竹大日如来は信仰と娯楽の間をたやすく越境した。

お竹大日如来をめぐるのは、嘉永二年の江戸での出開帳の時期を中心に多種多様な出版物が版行されたが、これらの出版物の流布は、縁起の正確さや、信仰と娯楽(聖と俗)の混交という現象を、進行・助長させる役割を担ったと考えられる。

## 註

- (1) 羽黒山は、近畿の大峰山おおみねさん 九州の英彦山ひこさんとならぶ修験道の聖地である。その麓には山伏たちの営む宿坊が建ち並ぶ手向集落があるが、その集落の中央に位置するのが黄金堂である。当初はこの羽黒山と月山がつさん・葉山はやまを出羽三山と称したが、近世以降、葉山にかわって湯殿山が出羽三山の一つとなった。岩鼻通明「出羽三山―山岳信仰の歴史を歩く―」(岩波新書、二〇一七年)参照
- (2) 「於竹大日如来縁起絵巻」(全三巻、羽黒山荒沢寺正善院所蔵)。本研究では国際日本文化研究センターのデータベース「於竹大日如来縁起絵巻」<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/otake/index.html> (小松和彦氏作成)に掲載された史料のデジタル画像と全文翻刻を使用した。データベースは二〇二〇年三月三十一日をもって公開を終了した。正善院は道路を挟んで黄金堂の向かいにある荒沢寺の末寺である。
- (3) この縁起絵巻では、竹の死の場面(中巻第二段)に続けて、「霊像」を彫る男とそれを拝む江戸の人びとが描かれているが(中巻第三段)、ここでは「霊像」についての説明はない。絵巻の最後(下巻第三段)に「偕また佐久間夫婦の人は」として主人の佐久間夫婦の説明がなされ、その中で「若干の資材を喜捨して等身の尊像を彫刻し、持仏堂二安置して、日夜念誦をやくとして、供養崇敬をそしたりける」とある。この等身像が絵巻の「霊像」、つまり後の寛文期に羽黒山黄金堂に移された像に相当すると考えられる。
- (4) 比留間尚「江戸開帳年表」(西山松之助編「江戸町人の研究」第二巻、一九七三年)。第二回の開帳については、出典の「開帳差免帳」には「江戸」とのみあり、具体的な開帳場所は不明であったが、後述の「旧記」により湯島天神であることが判明する(後註(17)参照)。なお、武蔵国橋本郡生麦村(現在の神奈川県横浜市鶴見区)の名主関口家の日記には、嘉永二年九月一日の記事に「神奈川浜吉祥寺二去ル九日より十三日迄五日之間お竹大日如来開帳有候二付、今日老母本家老婆およし同道二而参詣二行」とある(関口日記「第十一巻、横浜市教育委員会、一九七八年、本史料については大口勇次郎氏のご教示を得た。また、上総國の木更津の選擇寺でも出開帳が行われたと指摘されており(後註(29)関口他論文の「8 於竹大日昇天御影」(宮島鏡執筆、関口補筆)、お竹大日如来の出開帳は江戸だけではなく周辺地域でも行われたことが知られる。
- (5) 「於竹大日如来縁起」(『懐溜諸屑』国立歴史民俗博物館所蔵、頁一一四九二―一一四七七)。本稿の末尾に翻刻を掲載した。「懐溜諸屑」については、国立歴史民俗博物館ホームページ「館蔵資料データベース」(<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html>)の「館蔵『懐溜諸屑』」およびその「概要説明」参照。

- (6) 主要な研究は以下の通り。戸川安章『於竹大日如来―伝説と考証―』（羽黒山文庫、一九三二年）、同「羽黒山の語りもの―お竹大日絵解きを中心に―」（『絵解き研究』第九号、一九九一年）など。戸川氏は民俗学者。正善院住職の島津道愿氏は戸川氏の弟。斎藤岩蔵『お竹大日如来―（羽黒町観光協会、一九六五年）。斎藤氏は本書発表当時は山形県出納長。本書は同年発表の「お竹大日如来の信仰」（『むすび』昭和四〇年正月号、一九六五年）を加筆して刊行したものである。柳田國男『お竹大日』（藤田作編『日本文学大辞典』補遺・索引・年表、新潮社、一九三五年、後に『定本柳田國男集』第二十六卷、筑摩書房、一九七〇年に収録）、宮田登『お珊・お竹と白雲―はやり神の系譜―』（『洛世の名僧』人物探訪日本の歴史一、暁教育図書、一九七四年、後に『はやり神と民衆宗教』宮田登日本を語る3、吉川弘文館、二〇〇六年に収録）、同「お竹大日如来―江戸の都市伝説―」（『江戸文学』第二巻第四号、一九九〇年、後に『都市の民俗学』宮田登日本を語る9、吉川弘文館、二〇〇六年に収録）、牛島史彦『江戸の旅と流行伝―お竹大日と出羽三山―』（同編『江戸の旅と流行伝―お竹大日と出羽三山―』板橋区立郷土資料館、一九九二年）、山本則之『お竹大日如来譚私考』（同前）、森下みさ子『娘たちの江戸』（筑摩書房、一九九六年）「下女と如来―お竹―という事件―」、小松和彦『神になった人びと』（淡交社、二〇〇一年）など。
- (7) 「応現於竹大日如来略縁起」安永六年版（前註（6）戸川論文）。後掲の表1参照。
- (8) 以下の大伝馬町や佐久間善八・馬込勘解由については、高山慶子『江戸の名主馬込勘解由』（春風社、二〇二〇年）による。
- (9) 「馬込家・佐久間家過去帳写」（東京都江戸東京博物館所蔵、江戸大伝馬町名主馬込家文書、〇九〇〇〇五四四）。以下で馬込家文書をはじめとする同館所蔵史料を使用する際は、史料名と八桁の資料番号のみを記す。馬込家文書については、『大伝馬町名主の馬込勘解由』（東京都江戸東京博物館調査報告書第二二集、二〇〇九年）、および『東京都江戸東京博物館所蔵 江戸の町名主資料目録』（『江戸の町名主』東京都江戸東京博物館調査報告書第二五集、二〇一二年）を参照されたい。
- (10) 「佐久間家歴代当主覚書」〇九〇〇〇五四九。
- (11) 馬込家の御子孫も「佐久間家と馬込の關係は縁戚という間柄で、佐久間家が絶えた為、お竹様のことも佐久間家のお墓も馬込家でお預かりしたというように母から聞いた記憶がございます」と述べている（昭和三九年（一九六四）一月一四日）。前註（6）斎藤著書参照。
- (12) 「玉滴隠見」（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第四四卷、一九八五年、汲古書院）。本史料と後註（13）の「新著聞集」は、お竹大日如来の由来などを検証する際の基礎史料として、古くは文政八年（一八二五）三月に山崎美成（好問堂）が記した「於竹大日如来縁起の弁」（曲亭馬琴編「兎園小説」『日本随筆大成』第二期第一卷、吉川弘文館、一九六三年）、近年では前註（6）山本論文が検討を行っている。これらの史料の解釈については、山本論文に詳しい。
- (13) 神谷養勇軒「新著聞集」（『日本随筆大成』第二期第五卷、吉川弘文館、一九七四年）。
- (14) 『落穂集』（江戸史料叢書、人物往来社、一九六七年）。
- (15) 「太物店来由之話」（紺野浦二（川喜田久太夫）編『仕入帳』学芸書院、一九三六年）。
- (16) なお、「新著聞集」の引用記事の最後に登場する心光院は現在も港区東麻布にあり、流し板（竹、つねに網をあてし流し）などが現存する。馬込家六代当主の興承が宝暦一三年（一七六三）一月に作成した過去帳の冒頭に「増上寺江府龍口在芝崎村、馬込・佐久間二家共菩提所脇察心光院」（前註（9）「馬込家・佐久間家過去帳写」とあり、馬込家と佐久間家の当初の菩提寺は心光院であったことが知られる。後に馬込家の菩提寺は善徳寺になり、佐久間家は退転したが、竹の水板などは当初の菩提寺である心光院に納められたと考えられる）。
- (17) 「旧記」〇九〇〇〇四五九（『江戸大伝馬町名主馬込家文書旧記』江戸東京博物館史料叢書九、東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館、二〇一八年）。本史料により、不明とされていた開帳場所が湯島天神であったことが判明する。
- (18) 前註（1）岩鼻著書。
- (19) なお、斎藤岩蔵氏は昭和三九年（一九六四）二月四日に正善院を訪問し、黄金堂の再建事務所で、如来像の胎内から出たという、寛文七年（一六六七）等の年号入りの経文と「女の髪の毛を紙に包んだもの」などを確認している（前註（6）斎藤著書）。これを根拠として斎藤氏は、黄金堂の境内に建てられた大日堂は、伝承通り寛文六年（一六六六）建立と結論付けた。寛文期（一六六一〜七三）に竹の像が安置されたという縁起絵巻の記述もふまえると、お竹大日如来は当初から羽黒山の黄金堂に安置されたことになる。湯殿山と羽黒山との関係については今後さらなる検討を要する。
- (20) 前註（12）『日本随筆大成』第二期第一卷。
- (21) 高山慶子「大伝馬町名主馬込家文書と関連資料について」（前註（9）『大伝馬町名主の馬込勘解由』）。なお、善徳寺は関東大震災後の昭和二年（一九二七）に、浅草松葉町から現在地の北区赤羽五丁目に移転した（『新修北区史』東京都北区役所、一九七一年）。
- (22) 斎藤岩蔵氏は、前註（19）の昭和三十九年の調査により、竹の没年は寛文六年以前の寛永一五年であるとし、延宝八年は竹の墓が建てられた年と解釈している（前註（6）斎藤著書）。
- (23) 小津三百三十年史編纂委員会編『小津三百三十年のあゆみ』（小津商店、

一九八三年)。現在、小津本館ビルが建つ当地には「史蹟 於竹大日如来井戸跡」があり、この史蹟の説明板にも、竹は延宝八年五月に五八歳で亡くなったと記されている(前註(21) 高山論文)。

(24) 第三回の出開帳の年である文化二年(一八一五)に刊行された十返舎一九「お竹大日如来稚絵解」では、竹は羽黒山麓の徳右衛門・おせつという百姓夫婦の子とされ、これの廉価版に相当する一枚摺の「お竹大日如来稚絵解」では、湯殿山麓の徳右衛門夫婦の子とされる(前註(6) 山本論文)。

(25) 先に取り上げた前註(13)「新著聞集」に「ある時、頓死せしに、身も温なりしかば、若やはと、人々、守り居たるに、遂に蘇生したり」とある。

(26) 前註(6) 山本論文。

(27) 前註(6) 戸川論文。以下のお竹大日如来の絵解きについては本論文による。

(28) 前註(6) 戸川論文。江戸での出開帳の期間は嘉永二年三月二十五日から二ヶ月間であるが、「はじめに」参照)、絵巻の作成年代は嘉永二年閏四月とあり、出開帳の期間中にあたる。

(29) なお、寺社が発行する摺物は、祈禱の紙札など多くは一枚摺であるが、特に、御影ふだ・略縁起・境内図の三種は一揃いのものと考えられていた(阿部美香・前田智子・宮島鏡・寺津麻理絵・関口静雄「一枚摺の世界―その小釈の試み(2)―」『学苑』第八八号、二〇一四年)。表1の縁起は、陳列展示用の絵巻を除くといずれも版本であるが、版本が来場者に頒布されたかどうかは不詳である。一枚摺はこの版本の内容を簡略化し、来場者への配布・販売用に作成されたと理解できるが、先に示した『懐溜諸層』の縁起(史料1)は作成者や発行元の記載がなく、寺社側の手になるものかどうかは不明である。なお、お竹大日如来の出開帳でも、縁起類だけではなく、一枚摺の御影札や、御影札の版本(正善院所蔵)の現存が確認されている(同上論文、前註(6) 戸川論文、前註(6) 『江戸の旅と流行伝』)。

(30) ただし嘉永二年の縁起(版本)では、竹については「俗体之御影」の項で短くまとめられ、それに続く「流しの囊」「茶釜」「水晶の地藏尊」「不動明王」「弁慶の笈」という霊宝の説明に紙幅が費やされている。

(31) 前註(7)「応現於竹大日如来略縁起」。

(32) 作成年代は絵草紙掛名主の改印(出版検閲印)で比定できる。名主の印が一つの場合は天保一四年(一八四三)から弘化四年、印が二つの場合は弘化四年から嘉永五年の間に版行されたと判断できる。名主の改印については、「原色浮世絵大百科事典」第三卷(大修館書店、一九八二年)を参照。

(33) 「賢女烈婦伝」と「孝貞女鏡」は、「OKYOアーカイブ(東京都立図書館 <http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/top>)」「浮世絵検索」(<https://jankyo.org/>)などで、竹以外の女性を取り上げた作品を確認できる。

(34) 鳩ヶ谷宿の俗人行者である縁行三志(小谷庄兵衛)は、富士講の女人禁制を批判する天保五年(一八三四)一〇月付けの書状の中で、「此日本は、一体女の尊き国にて、東海姫子の国と有て、女帝様もたんとあり、亦女人成仏ならんと言ふが、当摩の中將姫はいかが。其外檀林皇后、光明皇后、智恵の至りは紫式部、勇力無双巴御前、近來お竹大日、其外多らひ女様がたんと御座ります。」と述べている(鳩ヶ谷市の古文書第十五集(小谷三志著作集三)、鳩ヶ谷市教育委員会、一九九〇年。本史料については、二〇一四年一月一〇日に上智大学で開催された「一九世紀日本の女性とネットワーク(二)」における、宮崎ふみ子「民衆宗教の信者ネットワークにおける女性の活動」の報告・配付資料参照)。出開帳の時期とは異なる天保五年に、江戸から離れた鳩ヶ谷宿でも、「近來」の「ゑらひ女様」として、お竹大日如来が知られる存在であったことを確認できる。

(35) 「(無題)(下女如来障子へうつる法のかげ)」(東京都江戸東京博物館所蔵、九二二〇七五八)。前註(6) 『江戸の旅と流行伝』、前註(9) 「大伝馬町名主の馬込勘解由」に写真と翻刻あり。本稿の末尾に詞書の翻刻を掲載した。

(36) 大久保純一『浮世絵出版論―大量生産・消費される美術―』(吉川弘文館、二〇一三年)。

(37) 吉田伸之「錦絵の社会Ⅱ文化構造」(浅野秀剛・吉田伸之編『浮世絵を読む』1春信、朝日新聞社、一九九八年、後に吉田著『身分的周縁と社会Ⅱ文化構造』部落問題研究所、二〇〇三年に収録)。

(38) 森田健司「江戸の瓦版―庶民を熱狂させたメディアの正体―」(洋泉社、二〇一七年)。

(39) 「於竹大日如来(国立歴史民俗博物館所蔵、怪談・妖怪コレクション、F1三二〇一四一九〇)。

(40) 「於竹大日如来だいたい所どうぐさんけいのづ」(東京都江戸東京博物館所蔵、九二二〇七五七)。

(41) 「日本橋代作屋文飛」(摺物代作引受につき引札)、『懐溜諸層』国立歴史民俗博物館所蔵、日一四九二二一一一三。本稿の末尾に翻刻を掲載した。

(42) 神保五弥『為永春水の研究』(白日社、一九六四年)、同「天保年間花笠文京の執筆活動について」(『近世文芸』六九、一九九九年)、同「天保年間の花笠文京―補正―」(『山口県立大学国際文化学部紀要』一一、二〇〇五年)。

(43) 前註(42) 神保著書には、史料5とは異なる版の「御詠文作認処 代作屋代作」の引札が紹介されている(『焦後鶏肋』(東条琴台収集の引札類の貼込帳)所収)。

(44) 前註(42) 神保著書では、こうした代書屋あるいは宣伝屋としての仕事の実態は、著名な戯作者の背後に存在する多くの無名の戯作者の実情を示すものとして注目されている。また、前註(42) 木越論文では、花笠文京は天保五年(一八三四)の火災で蔵書のすべてを失い、それが代作屋稼業を始める契機の一つになった

と論じられている。

(45) なお、お竹大日如來の錦絵は、本節で取り上げた表2のように、お竹大日如來が単独で描かれたものだけではなく、お竹大日如來と合わせて嘉永元・二年(一八四八・四九)に流行神となった日本橋四日市の翁稲荷大明神と内藤新宿正受院の奪衣婆の三体を一緒に描く錦絵や(富澤達三「錦絵のちから―幕末の時事的錦絵とかわら版―」文生書院、二〇〇四年、同「お江戸のキャラクター―幕末風刺画の『判じ物』から『戯画物』への転換―」地方史研究協議会編『日本の歴史を解きほぐす―地域資料からの探求―』文学通信、二〇二〇年)、お竹大日如來をもとに脚色された歌舞伎の一場面を描いた錦絵(「双蝶色成曙・於竹大日之由来」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵、前註(6)「江戸の旅と流行仏」参照)なども確認されている。お竹大日如來を取り上げた錦絵をはじめとする出版物の制作と販売は、本稿で取り上げた以上にさらなる広がりをもつて展開したと推定される。

(46) 西山松之助「市川團十郎」(吉川弘文館、一九六〇年)、服部幸雄「市川團十郎―江戸歌舞伎十二代の系譜―」(平凡社、一九七八年)、同「市川團十郎代々」(講談社、二〇〇二年)、木村涼「八代目市川團十郎―気高く咲いた江戸の花―」(吉川弘文館、二〇一七年)。自死した八代目團十郎は七代目である父の後妻すみの子で、当時深川木場の自宅には、後妻すみ、妾さと・ための三人が同居していた。

(47) 『日本国語大辞典 第二版』第九巻「とんだ霊宝」(小学館、二〇〇一年)。「とんだ霊宝」については、朝倉無声「見世物研究」(春陽堂、一九二八年、後に思文閣出版、一九七七年、および筑摩書房「ちくま学芸文庫」二〇〇二年として復刊)、川添裕「江戸の見世物」(岩波新書、二〇〇〇年)、クリストフ・マルケ「江戸の寺社開帳をパロディ化した見世物『とんだ霊宝』」(『アジア文化研究別冊』国際基督教大学学報三一A、二〇一〇年)など。

(48) 「とんだ霊宝」(東京都江戸東京博物館所蔵、九〇二〇四六〇)。本史料の写真と翻刻は、前註(9)「大伝馬町名主の馬込勘解由」に収録されている。

(49) なお、江戸落語中興の祖とされる烏亭馬場は見世物好きとして知られ、「三ヶ津伝来開帳富多霊宝略縁起」や「両国山広弘地開帳見世物語」を執筆した(延広真治「江戸落語―誕生と発展―」講談社学術文庫、二〇一二年、初出は「落語はいかにして形成されたか」平凡社、一九八六年など)。焉馬のように「とんだ霊宝」の摺物制作に直接関わったり、入船扇蔵のように「とんだ霊宝」の摺物を収集したりと、江戸の落語家は「とんだ霊宝」という見世物文化と近い位置にいたと考えられる。

## 史料翻刻

### 史料1「於竹大日如來縁記」<sup>(起)</sup>

於竹大日如來縁記<sup>(起)</sup>

出羽の国飽美郡羽黒山のふもと黄金堂に安置<sup>(あんち)</sup>奉る於竹大日如來の由来をたづね奉るに、寛永のころ東都大伝馬町に佐久間某といへる豪家<sup>(かう)</sup>に竹女とよぶ婢<sup>(めかけ)</sup>ありしが、行住座臥につけて念仏をとなへ、且仮初にも五穀<sup>(ごこく)</sup>をたつとび、我食をげんじ<sup>(ごうじ)</sup>て乞食牛馬に施<sup>(ほく)</sup>し、厨の水盤の水落しに布の袋をく、り置いて、洗ひながす雑菜<sup>(ざつさい)</sup>といへども聊<sup>(りやう)</sup>すつる事なく、又仕たてものなどハ一日二ひとへもの十まい余縫ひけり、これに准じて四季の衣類もつて人に倍せり勝手をはたらく事五十余人の米飯<sup>(めいべん)</sup>をたき、その水わさ等すべて凡にんのおよばぬおこなひのミ多かりければあるじ夫婦をはじめ諸人尊びおもハざるハなかりけり、其ころ武州比企郡に戒行<sup>(かいぎやう)</sup>堅固のひじりありて、大日如來の尊容を拜し奉らん事を深くねがひ、遠き道をいとはず、羽くろ山にまうずる事年久しかりしが、一とせ例のごとく登山して、ふもとなる黄金堂玄良坊宣安かたにしばらく止しゆくなす折からあるよの夢に金塔あらわれ、中に本尊

〔改行は史料の通り〕



ましまさず、たゞ座光のミ存せり、かたはらに

高僧ありて告たまわく、此塔ハ大日如来の

蓮座なり、今人中に化現し給ふ儀しらずや

東都にいたり佐久間なにがしが婢竹女と

いふものを拜すべしといふずぬ夢みたびに

およびしかバ奇異のおもひをなし、宣安にも

かくとかたるにもろともにおどろき尊び

うちつれだちて東都にきたり、佐久間某が

家にたづねゆき、あるしにたいめんして

ありし事どもをつくるに、あるじもさきの夜

夢の御つげありしゆへ彼ともからの来るを

まちしとて、たがひに仏ちよくのふしぎ

なるにかんるいをながし、その夜ひそかに竹女が

部屋をうかゞひ、兩人におがまするに、全身より

光明をはなち、一とますべてかくやくとして

瑞正美<sup>すいしやうび</sup>れのありさまなれば、兩人ハ

なんだせきあへずひじりへ

ことさらに多年の望<sup>のぞ</sup>ミ

たりぬとてよも

すがら称名を

となへ、夜あけ

て、本ごくへ

たちかへりぬ

次の日より竹女

ハ一室<sup>ま</sup>にこもり

昼夜ねんふつ  
してありしか、ある

日異香<sup>みかう</sup>

四方にくんじ

虚空<sup>こくう</sup>に花

ふり、□がく

きこへ、紫<sup>し</sup>うん

たなびくと

見へしが、竹女が

全身より光を

はなち、くもに

乗して西のかたへ

ぞ飛さり給ふ

時に寛永十五年

つちのへ寅のとし

三月廿一日なり

其後佐久間某

等身<sup>とうしん</sup>の尊像を

つくらしめ、黄金堂  
に安置奉りしかバ 卍

卍 世挙て於竹大日如来とも佐久間

大日とも称し奉りぬ、其後竹女がつかひし

水板<sup>みな</sup>より時々光りを放ちけれハ、佐久間

須藤両氏より芝赤羽根心光院に

納め、靈物となれり、此時心光院ハ縁山

の内道場にして、観智<sup>くわんち</sup>国師の御□なり

桂昌<sup>けいしやう</sup>院様にも上覧あらせられ袋箱

御寄附なさせられ、永く心光院の什宝と

仰ぐ、これなん仏陀ぶつたの方便

にて俗家ぞくかの少女と化生して

一切衆生にしんぐを發させ

青しやう□ん花台にみちびき

たまはんとの

大慈悲なり

尊まらずんば

ある

べからず

当嘉永二酉年

両国回向院に

於て開帳

寛永十五寅年より

当酉まで

年歴

二百十二年  
なり  
〔『懷溜諸層』国立歴史民俗博物館所蔵、日一四九二―一五―四七〕

史料2「無題」(下女如来障子へうつる法のかげ)

この年ありて、城東ぜうたうの馱えきに

旧家何某きうかにながしの下女げじよ於竹おたけといへ

るハ、貞節ていせつ艷美えんびにして、賤いやし

からず又貴たかからず、常つねに

無常みじやう迅即じんごくの一斯いちこを悟さとりて、

虫むしの命いのちも軽かろしとおもハず、一粒いちりゆうの

米よねも鼠糞そふんに交ましへず、妙理みやうりを

おもひてすたる物ものをたすく、

或夜あるよつぎの間に針業はりわざしてあり

けるが、同宿どうしゆくの戯男たがをたてやかなるに

心こころうごき、ひそかにイウかゞひしに、

灯ともしの影光かげくわう々として、あたかも

如来にょらいの仮かりに現あられ玉たまひて、

凡夫ほんぶを教化けうけしたまふ

かと恐れぬものこそ

なかりけれ

狂句  
下女如来  
障子しやうじへうつる  
法ほうのかげ

(東京都江戸東京博物館所蔵、九二二〇〇七四八)

史料5「日本橋代作屋文飛」(摺物代作引受につき引札)

御詠文作認所 代作屋代作  
御認物取次所 文飛堂文飛

一、神仏開帳縁起類

神道両部浮屠方便靈宝のゆらい等にいたる  
まで国史神書経文のうちより考証仕候

一、諸商売開店御披露

新規新工ふう再興四季をりくの引札一通り  
の文段ハもちろん狂文にもした、め申候

一、珍物見世物口上

生るい乾ぶつ造もの森羅万象真偽ニか、  
わらず其中と其物ニよりま□としやかに弁古仕候

一、売薬能書引札類

丸散丹円かうやく和漢秘法の伝来書あ  
んもんの長短御好ミ次第二仕候

右の外詩歌連俳和漢の文章ハ更なり、読本人情本草草紙類、  
無抛御頼れなされ御多用の節ハ速ニ御代作可仕候、又はらた浄瑠璃

の新文句素人狂言諸社御祭礼の思ひ付地口行灯の口上、俄茶番落咄し  
の趣向をも御相談可仕候、惣而文作ニか、わり候事何事ニよらず御問ニ合セ申候

御摺物返草類或ハ心学教訓の施印諸向御蔵板類校正いたし、

彫刻より摺仕立ニいたるまで諸色職方念入させ下直ニ差上申候

○儒家 ○書家 ○画家 ○鉄筆家 ○詩文家 ○和歌家

○俳家 ○狂句家 ○戯作家 ○劇場作家 ○絵家 ○備筆家

右海内諸文人先生方へ御認物御謝物下直ニ御受取申、御詠草るい  
御書翰ニいたる迄御いそぎもの御問ニ合セ可申候○東都ハさら也、諸国の歌

俳其外の宗匠方の其時々の新詠御入用の節ハ御洩し可申候 ○歌舞妓

○倡妓 ○帮間 ○女楽ぞか中ニも願雅才の芳君少からず、是又御認物

短冊扇面ニ不限、歌俳折句 冠付等の花評御詠草類迄も速ニ御用弁可仕候

□古流盆石指南 和漢珍石数品

玉サイ 店 日本橋木原店角

代作屋文飛

□光玉

銅印○石印○風鎮○風磐○キヤマン短冊掛○文房具類其外玉細工物品々

〔『懷溜諸層』国立歴史民俗博物館所蔵、H1—1492—21—1—13〕

(宇都宮大学教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇一九年八月五日受付、二〇一九年十二月二日審査終了)

## ***Otake Dainichi Nyorai* and Popular Folk Belief in Edo : Examining *Futokoroni-Tamaru-Morokuzu***

TAKAYAMA Keiko

Otake Dainichi Nyorai was a woman by the name of Take who worked as a servant in Edo and was enshrined in Dewa Province as the reincarnation of the *Dainichi Nyorai* Buddha. *Futokoroni-Tamaru-Morokuzu* (“A Scrapbook of Odds and Ends”) is a collection of *surimono* (a type of woodblock print) gathered by Senzō Irifune, a rakugo performer in Edo during the Bakumatsu period. This collection contains an *ichimaizuri* (single page print) in monochromatic ink called “*Otake Dainichi Nyorai Engi*,” which was printed when a *degaicho* (public exhibition of treasures) was held for *Otake Dainichi Nyorai* in Edo in the second year of the Kaei era (1849). This paper makes use of this *ichimaizuri* to examine the origins and story of *Otake Dainichi Nyorai* in addition to examining *surimono* and related published documents in order to better understand the beliefs and culture of the Edo public through *surimono*.

Analysis showed that *Otake Dainichi Nyorai* became widely accepted as a figure in Japanese syncretic Buddhism despite a lack of specific details regarding her origins and story. A great deal of publications were printed at the time of the *degaicho* in 1849, but the accounts vary due to being produced by multiple merchants for the purpose of boosting sales, thus creating doubt about their veracity. *Otake Dainichi Nyorai* was also seen as serving a role as entertainment; in addition to the publication of *surimono* and other *ichimaizuri*, fictional works were written, she was parodied as “*otame dainashi warui*” (a parodic mispronunciation of her name), and she was presented as a parodic bodhisattva rather than the reincarnation of *Dainichi Nyorai*. Not only an object of religious faith, she was rather a source of entertainment beyond faith to the people of Edo. The various publications circulated show that *Otake Dainichi Nyorai* served to advance and promote a phenomenon wherein faith and entertainment were intertwined.

Key words : Otake, *degaicho*, Dewa, Kuniyoshi, *tonda reihou*

---